

第 13 回女子美ミラノ賞報告書

16/SEP/2019-23/JUN/2020

浅井夏絵

はじめに

第13回女子美ミラノ賞によりブレラ国立美術学院の研究者として、2019年9月から2020年3月の期間ミラノに滞在し研究する機会を与えていただきました。このような機会を与えてくださった名誉理事長大村智先生、女子美術大学に心より感謝を申し上げます。

ミラノ滞在の動機・目的

バッグデザイナーとして就職したばかりの頃、浅草にあるエース株式会社が運営する世界の鞆博物館に行った。あらゆる時代のさまざまな国の鞆たちが展示されており、その中にあった真っ赤なレザーの鞆がイタリア製のものだった。それが最初のイタリア製のイメージだ。バッグデザイナーになり鞆を日常的に多く目にするうちに、イタリア製が持つ意味をととても強く意識するようになった。長い歴史を持つ国イタリア、あらゆる職人を育んだ国でありながら、ファッション界ではパリコレクション、NYコレクションと並ぶmodoの中心であるミラノがある国でもある。craftとmodoは対照的にも思えるが、両方が共存する国とはどんな国なのか、どんな文化的背景がありどんな価値観を持った人々がいるのか、その国の学生やデザイナーたちはどのようにデザインを学んでいるのか、そこに強い興味と憧れを持つようになった。

私は学生時代、1点1点を大切に作る職人に憧れていた。3年生の終わりから少しずつ就職活動をしていくうちに、ファッションとの関わり方に悩み、大量生産するくらいならともものを作ることを諦め、古いものに新しい価値を与えるというコンセプトの会社のスタッフになった。あるきっかけでとにかくデザイナーになるしか道は開けないと一念発起し、バックデザイナーとして就職し、商業デザインに携わるようになった。日本の市場に向けた商品作りをすることで始まった私のバックデザイナーのキャリアの中で、3年目にデザインしたナイロンバッグのシリーズが大ヒットしたことが大きな転機だったと思う。

自由な社風の会社は私の性格にととても合っており仕事も楽しかったが、商品がヒットし、なりたかったデザイナー像なのか悩み始め、自分がこの会社で勉強したかった売れるデザインをすることを十分学んだと思った頃、もう一度デザインを海外で勉強し直したいという気持ちが強くなった。海外でデザインやアートを勉強することには学生時代から憧れており、女子美賞にも卒業前から応募したいと思っていたが、今なら行く意味があると思い、応募する1年前の2017年の6月にミラノ賞に応募する準備を始めた。

私は自分のブランドを作ってデザイナーとして仕事をするのが目標であり、イタリアのミラノに行くことは、私のデザイナーのキャリアに大きなきっかけをくれるような時間になるだろう。この間にもう一度デザインをするということの根本に立ち返り、土台から練りなおしたいと思う。そして唯一無二のデザインができるようなデザイナーになること、それが私の揺るぎないミラノ滞りの目的である。

本文

ミラノではよく *"elegante"* という誉め言葉もらった。

この、“エレガントである”ことが、イタリアのファッションにおいてとても大切だということが分かっていった。

どこを切り取っても美しいイタリアの風景の中にと、自然と私も選ぶ色や素材が変わっていくのを感じた。石畳の中でもヒールのあるレザーシューズを履いたり、色鮮やかな建物に合うようなスカーフをよく着けた。風景や文化にファッションを合わせるのがとても楽しく、教授やクラスメートたちはよくファッションを見ていてくれて朝一番に、*"Molto bella!"* *"Elegante!"* といつも褒めてくれる。そして私も徐々に、自分が素敵だと思う気持ちを伝えられるようになった。言語では足りないが、ファッションでは一人前の“言語”を交わしているような気持ちがして、コミュニケーションを取れることが嬉しかった。

イタリアを知る価値観の一つがこの褒め合うことを含めた直接的な言葉を使う表現方法だった。日本とは正反対と言っても過言ではないこの文化は、状況によってはとても辛辣に思えたりするのだが、それ以上にとても親しみを込めたコミュニケーションであり、度々私のメンタルを助けた。とても明快に発音し声の大きなイタリア人の話し方と快活なキャラクター、直接的な言葉選びは（但しそれは私の言語能力で理解できるもの）、日本の江戸っ子のようなイメージだ。イタリア入りした時期は9月中旬で、青く晴れわたる天気とその国民性はよく似ていた。あるいは調理がシンプルで、素材を生かすイタリア料理にも似ている。

ミラノに暮らし始めてから気付いたことは、私は本当に美しいものが好きだということ。色合わせや、素材感、物のディテールや物の配置。夜風に揺れる丈の長いカーテンや、日が暮れていく空、強く巻かれた黒髪の天然パーマ、スーパーに並ぶ色の濃い野菜達。どこを切り取っても美しいのはミラノだけではないことをこの後色々な街を訪れて改めて感じるのだが、とにかく異国が珍しさだけでなく毎日目にするミラノの街が美しいことが私の心を満たし、新しい感覚を得たように感じていた。



近所の appartamento



初めて行った bar の caption

スーパーの野菜達



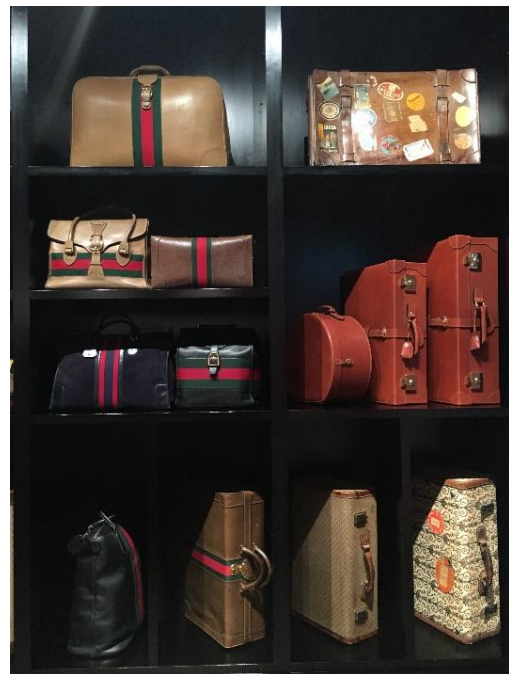
近所のガラス張りの小さな図書館



研究1 靴、靴の美術館

イタリア、特にミラノとフィレンツェには、主にイタリアブランドの博物館や美術館がある。これらに訪れ、イタリアファッションの歴史に触れることは私のミラノ滞在の大事な目的の一つだった。これだけファッションに関する *museo* があるということが、イタリアの文化にとってファッションがいかに重要で誇り高いものかを示していると思う。

Gucci garden





Museo salvatore Ferragamo





Armani Silos Exhibition Space



研究2 展示会、ファッションショー

ミラノでは世界的な見本市である大型展示会から学生のファッションショーまで様々な展示作品を見た。

MI



HOMI



LINEAPELLE

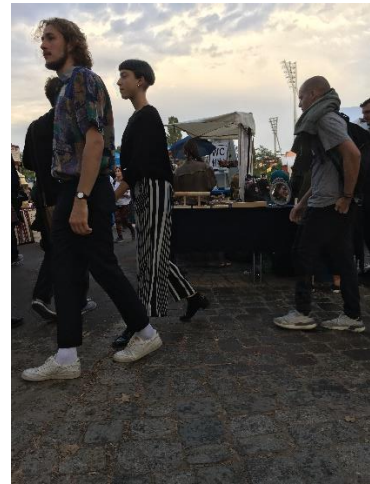




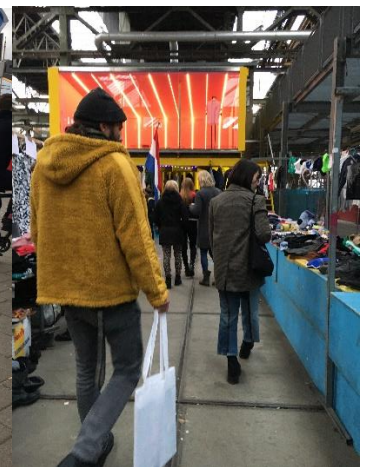
研究3 フリーマーケット

ベルリン、アムステルダム、ミラノでフリーマーケットに行き、昔の型のファッションアイテムを探す。ヨーロッパはECOの意識が高く、買い物袋やプラスチックのケースが少ないことが日常的にも感じられた。特にベルリンは菜食主義やファッション、アートシーン、フリーマーケットの盛り上がりにもそれを見ることができる。ヨーロッパのフリーマーケットはとても刺激的で、modoシーンとは違うファッションナブルな人々を見ることができる。日本人とは違うナショナリティやバックグラウンドを持つ彼らの自然体なファッションの着こなし方と自己表現は、髪型や色彩、洋服のシルエットや素材組み合わせに表れており、このリサーチはヨーロッパで最も心の躍る時間の一つだった。

Berlin



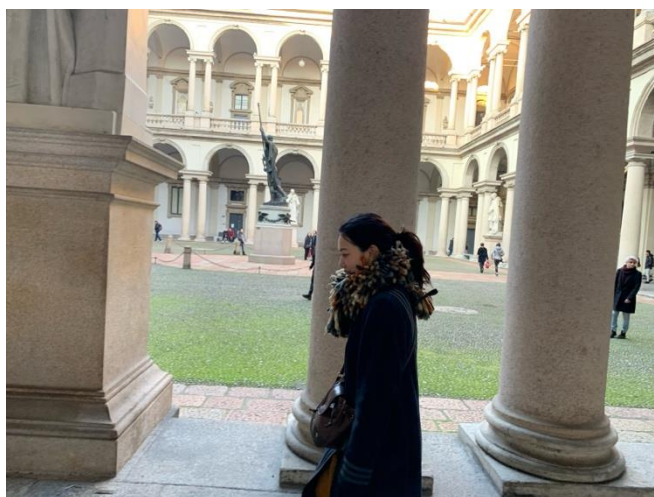
Amsterdam



研究4 学校生活

研究のメインである、*Accademia di Belle Arti di Brera* での学校生活を研究内容として最後に紹介したい。私はエラズモスというヨーロッパ間の交換短期留学制度の特例としてこの Brera に留学することができた。留学直後の授業を選ぶ時点で、学校側からはファッションのクラスを取ることを拒まれたのだが、清水先生の交渉によりなんとか4つのクラスを取ることができた。ファッションデザイン、ジュエリーデザイン、ファッショングッズデザイン、テキスタイルデザインのクラスである。どのクラスも授業は週に4時間から8時間程あった。授業の方法として女子美時代と違ったことは、学校の設備がとても簡素だということと、学生が能動的であるということだった。学校にはほとんど作業スペースや機材はなく、学生が外部でいろんなサービスを使わなければ課題を完成することはできない。授業中は先生が急に街に繰り出して美術館へ連れて行ってくれたり、ほぼ訓練のように毎回何時間もスケッチをしたりリサーチをまとめ、それを先生に何度も見せてアドバイスをもらう。少し発展するとデザインに入り、それも方向性を逐一先生にアドバイスをもらう。先生に見せるのも、今日の作業が終わったと思えば帰るのも自由だが、見せずに先へ進めば軌道修正が難しくなる。このような環境で10月から2月の課題提出までを過ごした。

この訓練の時間は私が1から練り直したかった土台を作るのにとっても大事な時間であった。仕事の中でもデザインがまとまらないことはあるが、この期間にそれぞれの教授は私にいろんなアドバイスをくれた。共通して求められたことは、作れる・使えるという視点ではない自由で生き生きとしたデザインであった。それは日本の中の売れるデザインとは対局にあり、またバッグデザインに重要な使いやすさとはかけ離れた感覚でもあった。その感覚に立ち返ることがとても難しく、出しても出してもうまくまとまらずとても苦しい時間でもあり、課題提出後も納得できなかった。また、テキスタイルの授業はコンセプトからインスピレーションまでの方法が難しく、デザインの段階では教授がアジアならではの可愛らしさをとても気に入っていたのも印象的だった。また、ジュエリーのクラスは扱ったことのない銅板を使ったジュエリーを作り、帰国後この方法を発展させて今開催中の展示会でも作品を作って展示しており、私の新しい表現方法を見つけるきっかけになった。







作品

↓ジュエリーデザインのクラス



tama
ANIMO MASCHILE

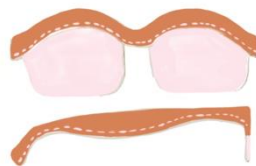
colore



logo



Natsue
Asai



インスピレーションを得た旅

この9か月の間、イタリアでは9つの都市、ヨーロッパでは4つの国へ行き、報告書には書ききれなかったが様々な人や美しい景色に出会い、数え切れないほどの感動があった。1シーン1シーンのこの感動の経験は、今も私の心を潤してくれている。

Venezia

ミラノで暮らし始めて最初に行った旅は VENEZIA BIENNARE を見に行くための3日間の Venezia への旅だった。現実とは思えないほど見るものすべてが美しい町。



入口に続く広場の赤いベンチ



入口前



路地 Veneziaの洗濯物干しスタイル 道の目印にもなっていた



私と建物



ピンクパンツの女性と作品



北欧館の作品



黄色のカットソーの女性と作品



お気に入りの北欧館の作品



モノクロの女性と作品

Murano

Venezia から水上バスに乗って行ける場所。古くからのガラス工芸の島。



Firenze

学校が始まる前に行ったもう一つの旅は革の街、Firenze。Gucci、Feregamo の博物館へ行くのが目的だったが、小ぶりながら歴史を感じるとても素敵な町だった。

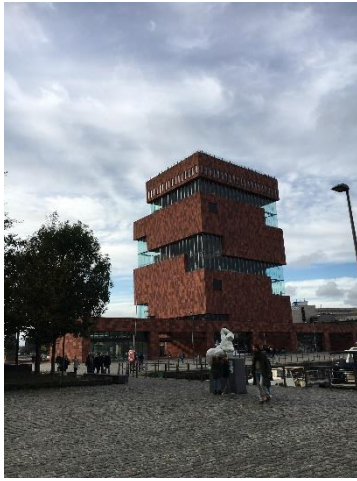


Belgium

10年ぶりのブリュッセル、アントワープへの旅。

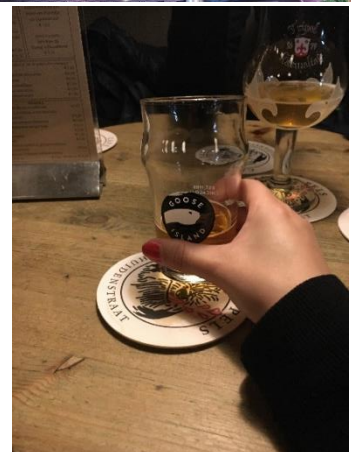
今回は女子美の友人であるユリに会いに。彼女は東京で増田セバスチャンさんのアシスタントをしており、その Museum MAS での展示とワークショップのために来ていた。Cool Japan と題された外国で見る日本の展示はとても独特な文化に思えた。





Amsterdam

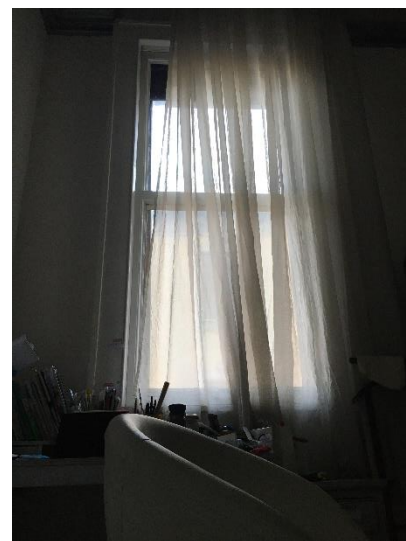
ワーキング・ホリデーでロンドンに滞在中のエミと現地集合の旅。



ミラノの住居について

今回私が住まわせていただいたのは、ミラノの中心へメトロで10分ほどのWagnerと言う駅にあるAirbnbで部屋を提供している駅からもトラムの駅からも近く、20~30分ほど歩けばDuomoまでも歩いて行けます。築百年で貴族の家のような作りのお宅で地下一階から三階まであり、二階部分の部屋の1つを長期滞在のAirbnbとして貸していただけるよう卒業生の古山春香さんに交渉していただき、住むことができました。こちらには家主の兄妹ご家族がそれぞれ三階と地下に住んでおり、とてもよくしていただきました。

居住スペースの2階にあるキッチンも共用でしたが、それ以外は自室にあります。1階の階段下ホールと奥にも部屋があり、誕生日パーティーや映画・雑誌・CMの撮影などをやっていたり賑やかな時期もありました。外出制限下もここだから乗り越えられたと思うほど広く、日当たりが良く、素敵な家でした。



帰国後の作品 (立ち上げたブランド C-cie- メインビジュアルより)



今後

帰国後私は復帰予定だった元の靴の会社に復帰し、社長の計らいで社内で新しいブランドを立ち上げることになりました。C-cie-(読み：シー)というブランドで、2021年5月よりローンチ予定です。

このブランドでは、バックグラウンドのクリアなものづくり、職人を守るものづくり、SDGsに関する取り組みをしたいと考えており、名前のCはそれらを表現した circulation、循環を意味する単語の頭文字です。ブランドのロゴはCというアルファベットが1周して花のモチーフになっており、一過性ではないものづくりをしたいと考えています。今回のシーズンはネパールの女性の労働支援のプロジェクトの1つです。

また、このブランドを作る際に考えたことの1つに色を使いたいというのがありました。ミラノで見た街の風景や、マダムたちの色遣いがとても素敵だったこと、またコロナ禍で家にいる時間が増え、部屋に色味のあるカーテンや花を飾っている時に、色には目から摂取するビタミンがあるなど思ったことがきっかけでした。ミラノ賞への応募のきっかけはまさに、自分の表現を見つけることでした。商業的な考えから少し距離を置き、売れることよりも唯一無二の自分の世界を表現するという意識に立ち返ること。それがきちんとビジネスとして成立すること、そのバランスを保ちながらその道筋を見据えて仕事ができていることが何よりも嬉しいことです。現在はinstagramに商品やイメージビジュアルを投稿していますのでよかったですら見てみてください。 https://www.instagram.com/c__cie/

またコロナ禍のイタリアで外出制限下にいた頃、私はオンライン上でアーティストの仲間と出会い、直接は会ったことのない仲間と作品を見せ合ったり、メンバー同士でワークショップを開催して作品を作ったりしていました。このグループをP U K A P U K Aと呼び、半年前から2020年を背景にした“distance”というテーマでグループセッションと、作品作りを行い、3月末よりその時のグループセッションや作品を、現在オンライン上で展示しています。 <https://www.pukapuka-official.com/>



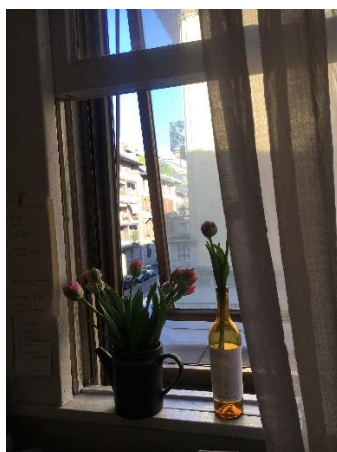
結び

2020年6月、このミラノの滞在は新型コロナウイルスの影響による自宅生活で終わりを迎えました。当初の予定では、ミラノでの滞在后、トリノに移る予定をしていましたが、2月終わり頃からイタリアでもコロナが広がり始め、3月初旬からロックダウンになり外出制限令により自宅から出ることができなくなり、フライトの見合わせが相次ぐ中、6月後半に何とかチケットを取り帰国したのです。

この“特別な経験”は、帰国して会う人皆に聞かれることになります。日本ではイタリアの医療崩壊のニュースで持ちきりだったようで、多くの人から心配の連絡をいただきましたが、むしろ素早いロックダウン、外出制限などの措置は国民を安心させる対応だったと思います。実際には初めは台風前のように食べ物を買込み、少し能天気と考えていた部分もありましたが、外出制限措置の期限が長引く度に気が重くなり、精神的につらい時期もありました。その中でも同じ状況下の隣の部屋に住むイタリア人の女性と、地下に住む家主の家族と毎週それぞれの故郷のご飯を作り合うなど、今までにはなかったイタリア人との交流もあり、とても貴重な時間も過ごしていました。

ある日突然歩けなくなり、静まり返った街。ある日突然会えなくなり、別れも言えず再会も叶わなかった先生や友達。引き離されたように離れたイタリアやイタリア語に触れる度に今も切なく胸がぎゅっと苦しくなります。きっとこの経験は世界中の人がしているだろうと思います。ミラノでの滞在は、この経験をなくしては語れません。このおよそ4か月の中には、これまでの日々にはなかった新しい生活があり、皆が同じ問題に取り組み、議論しながら慎重に過ごした日々、失ったものは多いですがそこには確かに育んだものがある、代え難い時間となりました。

また、ミラノに渡ってからすぐに、女子美の先輩方が歓迎してくださり、食事やアペリティーボに連れて行ってくださったり、家に招いていただきご飯をご馳走になったり、日本米を分けていただいたり、心細い私へたくさん交流を持ってくださり、美しく素敵な時間を過ごさせていただきました。そしてこのコロナの間も、女子美の先輩方にとっても心配していただき、たくさん情報をいただきとても心強く感じました。イタリアという遠い国に、こんなに私を気に掛け、見守ってくださる温かい先輩方がいるとは、行くまでは想像もしていませんでした。本当に感謝しています。いつかまたお目にかかり、改めてお礼を伝えられる機会があるよう願っています。ありがとうございました。



コロナ禍での生活の様子